

執筆者紹介

狐崎 知己 本学経済学部教授

Ivan González Pujol 本学大学院経済学研究科研究生

〈編集後記〉

月報 681 号をお届けします。本号は、スペインのカタルーニャ独立運動に関連して、狐崎知己所員と専修大学で在外研究しているスペイン人の学者イバン・ゴンザレス・プジョル氏が執筆した「カタルーニャ独立プロセスと社会契約の破綻」と「プロセス」に対する司法の現状」の2つの論文を掲載しました。また、今回の掲載に当たり、原著を尊重という意味で、プジョル氏のスペイン語の原稿を掲載するとともに、狐崎知己所員による日本語の翻訳原稿も掲載いたしました。

編者はスペイン経済の専門家でもなんでもありませんが、一サッカーファンとして、スペインのマドリードとバルセロナの国家ダビには毎回楽しみにしていました。バルセロナを中心とするカタルーニャ独立運動が展開する際に、スペインの国家ダビを観戦する際に、場内では異様な空気が漂ったことを記憶しています。

狐崎論文はカタルーニャ独立のプロセスについて、極めて詳細な歴史的事実を紹介し、カタルーニャ人のアイデンティティを確認するとともに、スペイン国内における経済社会の変化と地方自治の重要性を再確認しました。西欧近代思想は、自然法・自然権・社会契約をもって構成される契約説の流れがある。狐崎論文では、カタルーニャ独立の視点から、最後に社会契約の破綻を論じたことは近代の国家論の視点からも、極めて面白い問いを呈しました。

一方、プジョル氏の論文では、カタルーニャの独立プロセスにおける司法の現状について、最高裁判決を中心に、独立運動の状況を詳しく紹介してくれた。法治国家として、独立できるか否かは結局取らざるを得ないのは司法手続きで、この司法手続きは独立運動にどのような影響を及ぼしていたかを論じていました。

「強力な国家」は決して内生的に導出されるものではないが、結局国家は法規範・ルールが論理の「外側」から与件として与える他ならない。しかし、人々はなんらかの形で既存の国家に対する法規規範とルールを内部から批判するようになった時に、国民国家はどのように存続していくべきかについて、深く考えさせられる2つの論文でした。

(J. Y)

2020年3月20日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 宮 寄 晃 臣

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
